

口承文芸論から見た『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』 Nibelungenlied-日本とドイツにおける戦記物語の比較研究-

著者	ANDREA KUKLINSKI
号	5
学位授与番号	66
URL	http://hdl.handle.net/10097/36913

アンドレア ククリンスキ
ANDREA KUKLINSKI

学 位 の 種 類 博 士 (国際文化)

学 位 記 番 号 国博 第 66 号

学位授与年月日 平成19年 3 月27日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程)
国際地域文化論専攻

学位論文題目 ロ承文芸論から見た『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』*Nibelungenlied*
ー日本とドイツにおける戦記物語の比較研究ー

論文審査委員 (主査)

助教授	大 島	徹	教 授	藤 原	五 雄
			助教授	藤 田	恭 子
			助教授	澤 入	要 仁
			教 授	藤 田	緑
			教 授	佐 藤	勢紀子

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本とドイツそれぞれの中世に成立した戦記物語、すなわち『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』をロ承文芸論の観点から比較研究し、それによって戦記物語の媒体としての性質を明らかにすることを試みるものである。このような検討を通して本研究は最終的に、戦記物語という文学ジャンルの定義づけに寄与することを意図している。

有名な戦や英雄の行動を主題とする物語は、古代以来、世界のあらゆる地方で伝えられており、ホメロス作品や古代メソポタミアの英雄的な長編物語、中世ヨーロッパの叙事詩から日本の軍記物語にまで及んでいる。これらの作品は欧米のロ承文芸論において、通常、同一の文学ジャンルと分類されているが、そうしたジャンルの正確な定義もいまだなされておらず、ジャンルとしての統一した名称も得られていない。欧米において最も多く用いられている概念は„Epos“、„epic“であるが、概念規定には各国およびそれぞれの研究分野による相違が見られる。なかでも日本の「軍記物

語」という概念は、„Epos“の日本語訳とされている「叙事詩」の概念とは一致しておらず、「叙事詩」は日本以外の文学専用の概念として用いられている。上記のような混乱した状態を避けるため、本研究は、問題となるジャンルを示す用語として、叙事詩ではなく、あまり厳密に規定されていない「戦記物語」という語を使用することにする。戦記物語とは、古代や中世に合戦を主題として成立したあらゆる物語を一般的に表現する語であり、その点で問題となるジャンルを包括的に示すことが可能である。加えて、戦記物語という用語の一般性を考えれば、例えば日本の「軍記物語」やヨーロッパ各国の「叙事詩」等の用語に見られるように、特定の地域の文化的伝統と余りにも強く結びつけて規定されているがゆえに、それ以外の地域における物語伝統に認められる固有の特徴を見逃す危険性を回避することもできるのである。

しかし用語上の問題をこのような形で回避しようとしても、さらに重大な問題が残る。本研究で取り上げる文学ジャンルすなわち戦記物語は、文学ジャンル上の概念として、いまだ正確に定義されていないのである。正確な定義を得るためには、ジャンルの本質的な諸特徴を多様な視点から究明し、これらの諸特徴から、この文学ジャンルの全体像を構築する必要がある。本研究は、そうした定義のいわば準備作業として、戦記物語という文学ジャンルの諸特徴のなかでも最も本質的と思われる特徴を取り上げ、それについて究明することを目的としている。

そうした特徴を、本研究では、口承文芸論を踏まえ、作品の成立過程における口承と書承の絡み合いという観点から検証する。すなわち上記の諸戦記物語は、文字によって書き留められ、主に文字テキストの形で現在まで伝えられてきた一方、これら諸作品の特徴は元々口頭伝承から生まれ、その集成によって形成されていった。また、これらの作品の物語テキストはパフォーマンスを前提として成立し、本来、読書による受容がほとんどなかったとされている。諸戦記物語は、口承文芸からの影響を受けつつ書かれた文字テキストを生み出してきたという点で共通しているのであり、これらの作品が「書かれた」際には、書記伝承と口頭伝承それぞれが特徴とする成立条件が同時に働いたと想像される。各作品の成立背景には相互に異なる二つの媒体、すなわち口^{オーラリティ}承と書^{リテラシー}承という媒体が絡み合って活動したと推測されうるのである。このような仮説を踏まえ、本研究は、口承文芸論的方法を基盤としたうえで、戦記物語の具体例として『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』を取り上げ、両作品の表現構造において、口承と書承からの影響を同時に示唆する特質を探ることとしたのである。

比較分析の対象として『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』を選択した理由は、両作品が成立した際、物語の生成上、相互にまったく影響を与えなかったことにある。比較文学研究上、このように相互にまったく影響関係が認められない文学の比較は「歴史的・類型学的な比較」と定義されており、その利点は、二つ以上の作品の間に根本的な共通点が認められるが、それらの作品の成立過程において相互関係がない場合に、それらの共通点が作品のジャンル上の基本的条件であると確

認できる点にある。それに加え、とりわけ日本の作品をヨーロッパの作品と比較することには、さらに有益な点がある。中世ヨーロッパでは、文字文学特有の叙述法が発展するたびに、それ以前活発に行われた口頭的な叙述法が時を移さず押しつけられた傾向がある。そのため、欧米で行われている、ヨーロッパ中心主義の強い口承文芸論では、書承の世界は口承の世界より原則として優れているという考え方が支配的になっている。例えば『ニーベルンゲンの歌』に残される口承性についていえば、作者の書承性に関する技量不足によるものであり、作品の文学としての質をかなり下げているという見解が根強い。しかし、そうしたヨーロッパでの状況を日本の文学史上のそれと比べると、書記伝承優先の考え方は維持できないように思われる。なぜなら日本では、口承の世界と書承の世界が比較的長期に渡って並存していき、互いに多様な影響を与えたからである。『平家物語』が成立した時、その作者はすでに書記伝承特有の叙述法や構成法に関する長い伝統を持ち合わせており、書記伝承優先の考え方からすれば、口頭的な叙述法を用いる必然性がそもそもなかった。そのため、『平家物語』の書かれた文字テキストにおいて、口承性を示唆する表現法が実証できるならば、書承による叙述法が口承による叙述法と比べて、それ自体として優れているものではないことが証明できる。むしろ、口承による叙述法を文字テキストのうえで生かすことによって、『平家物語』の作者は受容者に対していかなる効果を目指したのか、という問題が提起されることになる。このような問題意識を踏まえ、『平家物語』から改めて『ニーベルンゲンの歌』を見ると、『ニーベルンゲンの歌』の口承性についても、それが単に作者の技量不足によるものではなく、受容者とのコミュニケーションにおいて独特な機能を果たすために、書かれた文字テキストのうえで意識的に用いられているのではないか、という可能性が目に入ってくる。

上記のような問題提起を踏まえ、本研究では各章を通して、以下のような考察を行った。

第1章では、本研究に関する先行研究を再検証し、本研究が採るべき方法論について検討した。

『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』を直接対照する研究例がいまだごく少数しかない原因を跡付けた結果、日本と欧米では、こうした研究に不可欠な概念が一致していないことが判明した。また、「叙事詩」の概念を中心に、簡潔な概念整理を行った。すなわち、欧米では、物語が口承と書承の中間的立場にあるという議論が主に叙事詩概念のもとで行われているのに対し、日本では、叙事詩概念はとりわけ精神史的な観点から定義されており、書記文学の解釈上の問題であるかのように取り扱われている。他方、日本において、物語と口承文芸との関連は語り論から議論されていることが明らかになった。従って、本研究は欧米における口承文芸論と日本における語り論とを相互に接近させるという方法を採用し、この立場から、第2章以降で、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』の物語テキストにおいて、口承と書承からの影響を同時に受けている現象を跡付けることにした。

第2章では、従来から両作品について行われてきた諸本研究を比較検証した。その結果、文学作

品としての『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』はともに、いわゆる「不確定テキスト」を特徴としていることが明らかになった。すなわち両作品は、相互に異なる本文を持つ複数の異本に代表されること、また語りにおける具体的な表現が可変的である点で共通している。そこから、両作品の意味は確定された表現すなわちテキストによるのではなく、テキストの背後にあるもの、すなわちすべての異本が同時に代表するコンテキストによっていることが証明されている。また、こうしたコンテキストを最も包括的かつ印象深く連想させるテキスト・ヴァージョンとして、『平家物語』の覚一本あるいは『ニーベルンゲンの歌』の写本Bが生まれ、各作品の形成をある意味で完成させたことが分かった。そこで、本研究は覚一本と写本Bにおける本文を基盤に、第3章以後の本文分析を行うことにしたが、それはあくまでも、変化しつつある作品の形成過程における特定の瞬間を解明することに他ならないことが念頭に置かなければならない。

以上の点を踏まえ、第3章から第6章までは『平家物語』の覚一本と『ニーベルンゲンの歌』の写本Bそれぞれの本文を直接比較対照したが、分析は合戦場面を中心に行われた。それは、ホメロス作品以来、物語における合戦場面こそが、文字化された長編物語としての戦記物語を本来の口頭伝承から区別しうるための指標であるとされているからである。それに加え、主として戦士の行いについてのみ語る『ニーベルンゲンの歌』にとり、『平家物語』は比較の対象とはなり得ない部分をも多く含むという、いわば実践上の理由もある。そこで、本研究では本文分析を合戦場面に限定することによって、両作品を比較可能にしたが、本研究の分析が作品全体の一部に限定して行われていることは、特に『平家物語』の解釈に際し、十分に念頭に置くべきである。

さて、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』の合戦場面を分析した結果、両作品の書かれた文字テキストにおいて、「口頭伝承を母体とした口頭的叙述法」と見なしうる表現法が四点抽出された。すなわち、1) 発話場面の多用と行為遂行性、2) 常套句的表現法、3) 伝承による、表現主体としての語り手の束縛、4) 物語の進行中に残されている文脈上の矛盾、である。第3章から第6章では、これらの表現法をそれぞれ、両作品の本文分析に基づき詳述した。

第3章では、両物語における作中人物の発話行為を分析の対象とした。『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』では、作中人物の発話場面が著しく多用されている。聴覚的な受容を前提とするならば、両作品は発話場面において書かれた文字テキストとしてではなく、聴衆の眼前で直接遂行される発話行為として受容される。両作品に用いられる発話場面の意味は明らかに、各発言が伝える内容にではなく、それらがパフォーマーによって直接発声されることにより、物語られている出来事が聴衆の眼前で実際に生起しているかのような印象を与えることそのものにある。さらに、そうした語り方の結果として、両作品における語り手たちは語りの媒介者としては背後に退き、パフォーマーによって音声化される作中人物自身の声を通して人物を直接登場させるのである。他方、物語が聴衆の前で実際に生起するかのように語られることによって、その聴衆は物語られる出来事を集

団として再び体験し、それによって聴かされる出来事の「真実」を再び肯定することになる。要するに、パフォーマンスのなかで物語を聴衆に共同体的な形で追体験させることによって、両作品は、とりわけ聴衆が物語られる出来事に関して有している集団的記憶に訴えるのである。

第3章で浮上した社会の集団的記憶と戦記物語との関係については、第4章において、「決まり文句」という観点からさらに考察を加えた。そこで明らかになったのは、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』において語り手が決まり文句や常套句的な表現法を多用し、聴衆の物語られる出来事に関する集団的記憶に訴えて語る点である。決まり文句は口承文芸の最も特徴的な表現である。本来、人々が共同体的に記憶している表現であって、特定の個人により作られる表現ではない。それに対し、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』の常套句的表現法は、書承文芸の特徴である、テキスト内に設定された語り手たちによって意図的に様式化されたものである。しかし、他方で、そうした表現法の目的が、語りのなかでの語り手たちの介在をむしろ隠すことにあることは、本章の分析により、明らかである。つまり語り手たちは、常套句的かつ定型的な表現構造によって、聴衆に働きかけ、自らの語りから社会の伝統的な考えや思い出を直接連想させ、聴衆が彼らの集団的記憶に基づいて語りを肯定するよう目論むのである。

第3章と第4章での考察によって中心課題として浮上してきた「語り手」たちの構築については、第5章で直接考察した。その結果、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』における語り手たちは、物語構造論上、両物語テキストに「書き入れられた」存在であると同時に、ある意味で表現主体でもあることが確かめられた。だが、語り手たちはそれぞれの表現を作り出すなかで、それら表現のあり方に対して、自分たちの権威をむしろ否定する傾向をも示している。そうした効果を得るために、彼らは自らの語りの視点に「一般の人々」の見方を持ち込み、それによって物語の真正性を保証する方法を用いる。こうした「一般の人々」の見方は、もともと口承文芸の場合、語りの場で実際に居合わせた聴衆が語りに対して与えた見方を前提としており、両作品の受容者が語りに対して集団として持っていたイメージを書かれた物語テキスト内部に反映させてきたものと考えられる。要するに、「一般の人々」という構想が示すように、両物語において語りの最高の権威者として機能しているのは、語り手たちではなく、成立当時のそれぞれの実社会が語りの対象に対して共同体的に記憶していた伝承であるのである。

第5章で論じた説は、第6章において、物語の文脈上の矛盾という観点からさらに裏付けられる。つまり、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』が物語の進行中に残している文脈上の矛盾は、それぞれの作者が伝承されている様々な話を一つの物語構造に統合しようとしつつも、各々の伝承をその核心において改変する権威を持ち合わせていなかったことを証明している。作者たちが優先させるのは、筋道の通った物語を構成することではなく、作品外部の伝承に担保された各場面に内在する意味をできるだけ感動的に再表現することである。そして、このような作者の立場は、自分の

態度を各場面の内在的意味に順応させるという語り手たちの構成上の特徴として表出している。両作品に見られる不統一な物語構成は最終的に、作品の意味が物語全体の構成によって規定されているのではなく、作品外部に存在する物語についての共同体的な記憶に依拠していることを証明するのである。

以上、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』に見られる共通点を簡潔に概括したが、本研究の分析結果により、両作品に関する重要な相違点も明らかになった。しかも、この相違点は両作品それぞれの文化的背景と深く関連しており、その意味で逆に、両作品のジャンル上の共通性をむしろ鮮明に浮かび上がらせる。すなわち、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』の成立当時、日本とドイツにおける書記文芸の伝統は水準を大きく異にしており、それが両作品にも反映されている。まず、両作品の諸本事情を見ると、『平家物語』は『ニーベルンゲンの歌』と比べて、書かれた文字テキストとしての豊富な伝統が残されている。それは、『平家物語』が成立した当時の日本において、物語を書くという行為にはすでに長い伝統と歴史があるのに対し、『ニーベルンゲンの歌』は、ドイツ語における物語が文字テキストとして定着しはじめた時期に成立したからである。実際、両作品の表現構造の分析からも、『平家物語』が一定水準の文学性を備えたテキストとして構築されていることは明らかである。物語における話法行為、常套句的表現法、語り手の構造、矛盾した描写という四つの表現構造においても、『平家物語』は物語的叙述の多様性に優れており、『ニーベルンゲンの歌』の作者がまだ駆使できない複雑かつ巧妙な語り方を数多く用いている。なかでも、両作品の語り手たちの構築に関する相違点は著しい。『ニーベルンゲンの歌』の語り手は、口承による叙述法をまだ作品の自然な言語としていわば無意識に用いるかのように設定され、語り手の媒介性が知覚されうる部分は多くない。それに対して『平家物語』の語り手は、自らの語り方に対して高度な文学的意識を示し、書記文芸に適応した表現構造のうえに口承による叙述法をむしろ意図的に復活させる者として設定されている。『平家物語』は、書記文芸に特有な叙述法という点で、『ニーベルンゲンの歌』よりはるかに優れているのである。

それだけにいっそう驚くべきは、『ニーベルンゲンの歌』のみならず『平家物語』も、口頭伝承による叙述法を、書かれたテキストにおいて多様に採り入れ再生させている点である。『平家物語』は『ニーベルンゲンの歌』と異なり、口頭伝承特有の叙述法が、作者の書記性テキスト特有の表現法に関する技量不足に起因するとはいえない。それにもかかわらず『平家物語』もまた、口頭伝承特有の表現法を多様に採り入れていることに鑑みれば、書記伝承による叙述法が口頭伝承による叙述法と比べて原則として優れているという理解は妥当性を欠いている。むしろ、『平家物語』の作者は、口頭伝承に適した表現法を意識的に用い、それによって作品のジャンル上の要件を満たしたと解釈すべきである。また、そこから改めて『ニーベルンゲンの歌』に目を向けると、その口承性もジャンル上の根本的条件を満たすために、書かれた文字テキストのうえで意識的に用いられてい

る、と考えられる。『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』は、書記性という点でその文学的発展のレベルを大いに異にしているとしても、口頭伝承による叙述法を多用し、書かれたテキストのうえに復活させるという点で根本的共通性が認められる。両作品は、その成立過程において相互関係を持たなかったがゆえにこそ、そこで見られる根本的な共通点はジャンル上の根本的条件として確認できるのである。

以上、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』について、本研究で分析してきた根本的な共通点と相違点を照らし合わせ、両作品の文学ジャンル上の共通性を確認した。それによって、両作品の成立背景には、口承と書承という相異なる二つの媒体が絡み合って作用したという仮説が証明された。この結果を踏まえ、本研究は『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』がともに、戦記物語という同一の文学ジャンルに属していることを確認し、戦記物語という文学ジャンルの特質を、媒体としての視点から、以下の三点に総括する。

1. 『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』に見られるように、戦記物語は、口頭伝承を母体とした口頭的叙述法を文字テキストとして再構築したものであり、「文字化された口承性」を特徴とする。
2. 「文字化された口承性」を充分に発揮するために、戦記物語は、創作および受容両面において、何らかの口頭的パフォーマンスを前提としている。
3. 戦記物語の諸作品が成立当時に持っていた意義と目的は、作者と受容者共通の過去に関する集団的記憶を表現し、その表現を通して集団的記憶を繰り返し再生し、維持することにある。その過去は、当時の受容者の集団的自己理解にとって、本質的重要性を備えたものであるからである。

以下、これらの三点それぞれについて概括したい。

上記の特質 1. に関連して、両作品は、もともと無文字社会に誕生した口頭的叙述法が、書かれた物語テキストにおいていわば「文字化」されたものであることを明らかにした。ところで、こうした「文字化」という概念には、ドイツにおける言語学研究で指摘されているように、基本的に二つの可能性が内在する。すなわち、一つは、言葉が発言された形態のまま書き留められ、具体的な音の相違がまったく起こらない場合である。いわゆる「音声言語志向の文字化 („Verschriftung“)」であり、その具体例は、口頭による言葉を正確に再現しようとするすべての記録に見出される。音声言語志向の文字化に加え、「文字言語志向の文字化 („Verschriftlichung“)」ということもある。それは口頭による言葉が文字化される際、表現の具体的な形態が書記文学に特有な叙述法に従って改変されることを意味し、その極端な例は、あくまで形式化された表現を特徴とするテキストに見

られる。

さて、上記のような概念区分に関して有意義なのは、この二つの文字化が両立不能な、概念上の二分法を意味するものではないという点である。極端な例を除けば、ほとんどの場合、両方の可能性はたとえその程度が相互に異なるにせよ、一つの文字テキストに同時に具現される。一つのテキストにおける音声言語志向性あるいは文字言語志向性の割合は、そのテキスト特有のジャンル上の慣習、テキストを作成する人の文学的な技量や好み、テキストが受容される過程で目標とする効果、などによるのである。そこから改めて『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』における文字化について考えると、両作品における叙述法は、表現構造の表層上はあくまで文字言語志向性を示し、口頭的叙述法を書かれた物語の文体としても適切な言語に改変させたものである。しかしその一方で決定的に重要なのは、元来の口頭伝承に由来する口頭的叙述法の持つ受容者へのアピール作用がそのまま機能している点である。すなわち両作品は、口頭伝承の語りが聴衆へ働きかける仕方と同様、パフォーマンスにおける聴覚的受容を前提とし、とりわけ受容者の集団意識、彼らの感情や感想に訴える。その意味で、口頭伝承から生まれた叙述法は文字化されても、口頭的な語りを受容者に対して持つ効力を保存していった。要するに、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』において文字化されたものは、各物語そのものというより、むしろ両作品が基づいている伝承に昔から備わっている口承性なのである。

上記の考察から、戦記物語の媒体としての特質 1. は、特質 2. をその前提条件としていることが明らかである。それに関連して重要であるのは、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』の内在的口承性が、とりわけ物語の意味伝達のあり方と深く関わっている点である。すなわち両作品は、受容者が作品を受け取る際、その内在的意味を何に依拠して理解するかという点で、口承文学との共通性が認められる。本来、口承文学は、物質的な存在である文字テキストを持たなかったために、その内在的意味も確定されうるテキストからではなく、口頭的語りを受容者のなかで連想させるコンテキストから明らかになった。その点で『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』がとりわけ受容者たちが持つ集団的記憶を彼らに連想させようと意図しているという本研究の分析結果は、極めて有意義である。つまり、両作品が伝達しようとする意味は、テキストという確定された言葉自体から離れ、その背景にあるコンテキストに、すなわち受容者である聴衆が集団的記憶としてある特定の情報を繰り返し想起し、そのことによってこの情報を繰り返し確認するというコミュニケーション行為そのものに認められる。受容者がこうした意味を十分に理解できるためには、受容過程において何らかの口頭的パフォーマンスが不可欠である。両物語がパフォーマンスにおいて受容されない限り、本研究が両物語のテキストにおいて分析してきた四つの叙述法は、その内在的可能性を十分に発揮することはできない。すなわち、受容者の眼前で直接遂行されるかのような発話行為、人々の共同体的な記憶に働きかける常套句的表現法、聴衆をも含み得るような「一般の人々」を語り

の最高の権威者として構築する語り手、複数の場面の間における一貫したつながりより、一時に語られる一つの場面の雰囲気や状況を大切にする語り手、という叙述法のすべては、聴衆の前で直接語られることを前提としつつ構築されている。また、両作品の諸本事情から明らかになった不確定テキストという性質も、受容者にとって確定されうるテキストが存在しない口頭的パフォーマンスの蓋然性を裏付けている。以上の考察から要約すると、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』は文字によって書きとどめられ、書記性という点である程度（具体的な程度がそれぞれの作品で大いに異なるが）文学的なレベルに達しているにもかかわらず、口承文学と同種の口頭的媒体としての受容を前提とし、その点でジャンル上の根本的な共通点を示しているのである。

ところで、このように戦記物語の特質1. と特質2. を理解するとき、そのような特質を持つ文学ジャンルの意義と目的が必然的に問われなければならない。本研究ではその点を特質3. としてまとめたが、それに関連して以下のような点を指摘したい。

本研究の分析から明らかなように、『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』は、とりわけ受容者の集団的記憶、集団意識に訴えて語る。両作品が語る物語は、作品成立当時の受容者にとって新しい情報を伝えるものではなく、以前から記憶していた情報を再び呼び起こすことを意図していた。またパフォーマンスにおいて、聴衆は物語を集団として受容し、物語を聴くことによって体験する感情をも集団として体験することが重要である。同じ感情を集団としてともに体験することは集団の成員相互に働く連帯感を強め、集団の結束力を固める。言い換えればパフォーマンスは、集団としての同一性を保持する作用を持つのである。

上記のような受容面上の条件から判断すると、両作品が成立当時の受容者にとって持っていた意味は、それらが成立した社会において「真実」と思われていた一連の伝承を最も説得力のある形で再現し、それによってそうした伝承の真正性を改めて確認することであった。そうであるならば、これらの作品は現在の受容者（研究者）にとり、歴史的資料に類する性質を持つといえる。とはいっても、両作品は題材としている事件そのものに関する史料としてではなく、成立した社会における自己理解、すなわちその成員たちが共有していた思考、感想、価値観、伝承などを明らかにする史料として有効になる。しかも両作品は、語りの視点が社会の集団意識を代表することにあるために、社会の歴史的自己理解を解明するための理想的な資料ともいえるのである。

以上の結論を踏まえ、今後取り組むべき重要な研究課題となるのは、史料としての『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』が成立した社会における自己理解において、具体的にどのような点を反映させたか、という問題である。それに関しては、本研究の問題設定とやや異なるため、ここで詳細に述べることはできないが、それぞれの作品については以下のような問題解決が有意義だと思われる。『平家物語』の場合は、なかでも覚一本以降の語り本が主題とする平氏一門の悲劇的な運命が注目される。この点を室町時代に政治的・社会的昇進を遂げた足利氏の自己理解と関連づけるこ

とが重要な研究課題であると考ええる。また、『ニーベルンゲンの歌』の場合は、語りの焦点が一方的にブルグンド族の滅亡にある。それが、1200年ごろのドイツにおけるシュタウフェン朝の権力構造内に起こった危機による社会的不安心を反映しているのではないか、という問題が提起される。

『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』は、もっぱら人々の集団的な情緒や意識、彼らの社会としての自己理解に訴えている。それゆえにこそ両作品は、それぞれの成立当時に生じた激しい政治的・社会的変化がその社会の集団的精神状態や心理状態にもたらした影響を反映しているものであり、上記の問題点が今後の有益な研究課題となるのである。

以上、本研究の目的、方法、分析結果について概括的に述べてきた。戦記物語という文学ジャンルをその媒体としての特質から理解すれば、日本の『平家物語』はその根本において、『ニーベルンゲンの歌』等に代表されるドイツの叙事詩伝統と比較可能である。具体的な経過はそれぞれの文化において異なっているが、中世の日本とドイツではともに、口承オーラリティと書承リテラシーという媒体が並存して互いに刺激を与え合う状態が続いていった。こうした状態は日本とドイツ双方において、その時代に成立した語り物の書き留められたテキストから読み取られ得る。なお、ここで確認してきた原則が日本とドイツ以外の他国の戦記物語の伝統にも同様に適用できるかという問題は、今後の研究課題としたい。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本とドイツでともに中世に成立した『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』を口承文芸論の観点から採り上げ、両作品の表現構造にみられる口承と書承というふたつのメディアの絡み合いを検証する。進んで、両作品が同一の文学ジャンルに属し、そのジャンルは「戦記物語」と呼ぶのがふさわしいことを論証する。『平家物語』と『ニーベルンゲンの歌』の間にはまったく影響関係がみられない。ふたつ以上の作品の間に根本的な共通点が認められながら、それらの作品の成立過程において相互関係がないとき、それらの共通点が作品のジャンル上の基本的条件であると確認することができるのである。

本論文は、上述の目的をもった6章と終章からなる大作であるが、その概要は以下のようなものである。先行研究の再検証ののち、欧米における口承文芸論と日本の語り論を接近させることを確認する第1章に続いて、両作品の諸本事情から不確定テキストという性質が明らかにされる第2章。以下順次、作品に多数みられる発話行為は受容者の眼前で直接遂行されるかのようなものであること（第3章）、多用される常套句的表現法が人々の共同体的な記憶に働きかけること（第4章）、語り手は、聴衆をも含み得るような「一般の人々」を語りの最高の権威者として構築する（第5章）、語り手は、複数の場面の間における一貫したつながりより、一時に語られる一つの場面の雰囲気を大切に

すること（第6章）、そして、論文の結論をまとめ、残された課題に触れる終章と、豊富な引例によって詳述する。

本論文の著者は、日欧の資料を広く渉猟し、豊富な用例を示しながら入念に論考を進める。これまでの研究では、両作品のそれぞれについては歴大な成果が得られているが、その比較研究は極めて限られ、必ずしも成功しているとはいえない。本論文の著者は、ドイツと日本での豊富な研究の蓄積を基に、日欧の成果を十分に吸収した上で自らの論考を展開させるのに成功し、口承文芸論の手法を導入したことによる新しく、貴重な知見を示している。注の付け方の過不足や先行研究の学説と自説の境界があいまいになっている箇所が指摘されたり難点がまったくないわけではないが、論文全般については極めて高い評価が与えられた。

このように、本学位論文審査対象者、ククリンスキ、アンドレア氏は、自立して研究活動を行なうに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。